



## ■青年の船事業

### 青年海外派遣事業

昭和三十四年から、総理府が実施している事業で、この事業には、長期派遣（約一か月）短期派遣（約二週間）の二つの事業があるが両方とも航空機を利用し、約十四〜十五名が一つの班となり、各コース、ヨーロッパ、中南米、北米、アジア等の班に編成されて各国を訪問することになっている。この事業も、現地での産業、文化、社会制度等全般にわたる視察見学をするもので、本年の熊本県代表は、長期派遣が中部ヨーロッパ、短

## 青年の船事業

期派遣が、北米班と東南アジア班に参加している。

この事業も総理府が、昭和四十二年から実施しているもので、「九州青年の船」と内容はほぼ同様で船内研修、現地での視察見学、青年との交流が行われる。本年度は、オーストラリア、ニュージーランドが訪問国で、期間は約二か月間と長期であり充実した研修が期待されている。

以上が、青年の健全育成事業として実施されている主な海外派遣事業であるが、いずれの事業も参加資格は、満二十歳から二十五歳までの青年男女で、現在将来ともに、地域や職場、青年団体等で青年のリーダーとしての活躍が期待される有望な青年となっているが、海外渡航の経験のある者、在学中の青年は除かれている。

このように青年の海外派遣事業は、国、県で積極的に進められているが、帰国後も、参加した青年達は、それぞれのグループをつくり、日頃の活動状況や、仲間の生活状況を伝えあひながら、青年運動の中心的役割をはたしている。

この事業について詳しく知りたい方は、県庁福祉生活部県民生活室、代表六六一一・一内線二八八・二七六五へ電話くださればご紹介いたします。



## 長期派遣に参加して

小川町北海道（農業） 森田良光

私が参加した青年海外派遣の長期は、昭和三十四年の皇太子ご成婚記念事業の一つとして総理府が毎年行なっているもので、今年はその第十六回。今年、九十六名が北欧、中欧、南欧、アフリカ、中近東、オセアニア、北米、中南米の八班に分かれて、九月十二日から十月九日まで二十八日間の研修を行った。

研修目的は、訪問先の国の諸団体との交歓により、その国民性や風土の理解および国際親善ということ、名称がJAPANN・GOODWILL・MISSIONとなっている。

私の班は中欧班で、まず飛行機でシベリアの果てしなく続く森を越えてモスクワ入り。驚くほど地下鉄は深いところもあり、もうすでに冬仕度の中で二



▲フィンランドの小学生が我々のために国歌を歌ってくれました。

## 青年海外派遣に参加して

（中近東アジア一カ月の旅）



熊本市薬園町（銀行員） 山本和子

すべてが初めて。緊張でいっぱいなのに飛行機から降りたとたん、もう私の方

をじっとみて、「ワンルビー」と子供が手を差し出す。ああ、ここはインドなのだ。だがこの戸惑いも、いつのまにか団員の間では「ワンルビー」が流行語となってしまう。町を歩けば人・車・牛の波。今にも溢れんばかりだ。職も持たず、あちこちに坐りこんでいる人々の表情は無気力。ただ時の流れを待っているように見える。確かに暑い。カー

ンドを思い出すのである。トルコは親目的である。一種の信頼と尊敬の念を持ってもらっているようだ。私たちの姿を見ると、子供たちまでが「ジャポンノジャポン」と言いながら寄ってきてくれる。

イスラム教がもたらす多くの束縛の中で、私たちが接したのは、バスの運転手が行っていたラマザン（断食）である。この期間、夜明けから日没まで、水はもちろん、唾も飲みこまないという徹底ぶり。しかし、「若者の間では、労働意欲の低下と受けとり、イスラム教を否定する者も増えてきている。」と、交歓会の席上、一青年が語ってくれた。

タイでは、タノム政権がクーデターにより交代する、という歴史的事件に遭遇し、学生運動から発したとはいうものの、対日感情の悪化は否定できず、刻々と変わる情勢の中で日本人とわかる団服、パスジ、名前をとり、三台の車さえも連れねって走ることは危険だと知らされた時、不安は最高潮に達した。最後の訪問国シンガポールに着いた時、日本に帰ったような安堵を覚えずにはおられなかった。

旅行に参加して一年余り、時がたてばたつ程、すばらしい経験だったことをひしひしと感じている。そして多くの友を得たことも……。

それから日本の明治の富国強兵などの諸々の近代化した時期を想像させる共産国ルーマニアで四泊。西ドイツでは、アウトバインのみごとさに感嘆し国の偉大さを知りつつ六泊。最後は重点訪問国のイギリスに十泊。ミニとビートルズを生んだ新しい世界の先駆者の今昔を見た。私達は班のテーマを「ヨーロッパの共同体づくりにおける青年参加」として、いろんな施設や行政機関などに触れ、その国の風土を眺めた。その感想としていえることは、封建社会から近代そして現代に至るまで侵略と闘争の歴史の繰り返しから成り立つそれらの国々には、それなりの事情があるということを確認しその相異を理解しつつ国際友好を行う必要があるということだ。

日本が一番いいと思う自由さの中にと、甘い慣れ合いを知らない貧乏国が世界の何か国語を流調に喋べるのを聞いて言語による世界制覇というか、本当の国際交流に弱いという日本人の裏面を感じる旅だった。



▲インドの飢えた子供たち

現在、世界的な食糧危機が叫ばれている中、その言葉を聞くたびに、